

イラン・パペ(1954~)

『イスラエル・パレスチナ紛争をゼロから理解する』

河出新書 2025 年

1 歴史の文脈

— 紛争は2023年10月7日にはじまったわけではない —

(p.177) イスラエルとパレスチナに平和と正義がもたらされるという希望をわずかなりとも見出すためには、鍵となる歴史上の文脈を思い返す必要がある。

イスラエルにとっては、わたしたちが全員が歴史を忘れ、パレスチナ側の暴力は狂気の沙汰であってユダヤ人殲滅のためというレンズを通さないことには理解できないと考えてくれたほうが都合がいい。そうすればイスラエルは、以前なら道徳的・戦略的な見地から却下しただろう数々の政策を遂行するたえの白紙委任状を手に入れられる。そして欧米諸国もそれに倣うのだ。

➡ 本書は、忘却に抗って、歴史の文脈を読み解く試み

○ 日本のアラブ文学者の岡真理『ガザとは何か』(大和書房 2023)

- ・ 主流メディアの報道を見ていると、この出来事(2023年10月7日のハ马斯のテロ行為)を、「なぜそのような出来事が今、起きているのか」「そこにはどのような歴史的背景があるのか」といった歴史的な文脈から切断して、テロ集団「ハマス」がユダヤ人に対する憎しみに駆られてテロを行い、テロに見舞われたイスラエルが自衛権の行使としてテロ集団殲滅を目指して報復しているというような形で、出来事の、非常に限定的な一部分のみにスポットを当てて、それを「暴力の連鎖」「憎しみの連鎖」といった言葉でまとめています。(p.151)
- ・ ガザについて語る機会がある折に、韓国の文富軾(ムンブシク)『失われた記憶を求めて』という、1980年の光州事件の記憶を綴った本で引用されていた一節「忘却が、次の虐殺を準備する」を引用する。ガザで起きた出来事を忘れたら忘却によって次の〈ガザ〉への道を整えてしまう。(p.123)

➡ 忘却がその要因のひとつを構成する紛争

では、歴史の文脈とはなにか。

「ユダヤ人国家が歴史的パレスチナに建設されたのは、それがひとえに第一次世界大戦中および戦後の大英帝国の国益にかなったから(p.181)」とあるように、その背景には大国の思惑があった。

2 大英帝国の植民地支配

○ 大英帝国の植民地支配

20世紀初頭、世界の1/4を支配するという、人類史上もっとも巨大な帝国となったイギリス。たとえば、インド

では、時のヴィクトリア女王がインド帝国の女帝となり、ヴィクトリアのもと、インドがひとつの家族であるとして支配を行う。しかし、その実体は苛酷な搾取であり、現地住民を労働力として天然資源を確保、茶葉や阿片を栽培させ、莫大な貿易黒字を得て、税金を徴収し安定的な財源とした。またイギリスの支配は巧妙で、英語やイギリスの価値観を教え込んだエリート層に統治を任せ、民衆の不満が直接イギリスに向かわないようにしてきた。インド人自身にインド人を厳しく管理させ、抵抗する勢力は暴力で抑え込んだ。

(NHK 映像の世紀 バタフライエフェクト イギリス王室 大英帝国の栄光と贖罪 より)

○ パレスチナでは入植者植民地主義(セトラー・コロニアリズム)

(p.38) 古典的な植民地主義では、イギリスがインドを統治したように、あるいはポルトガルがアフリカの植民地でおこなったように、植民地は大都市から統治される。その目的は、先住民たちを忠実な植民地の臣民にすることであり、植民地の支配的な多数派になることではない。一方、入植者植民地主義では、先住民社会を宗主国の社会で完全に置き換えることを目指す。入植者は、自国の大都市から見捨てられた人びとであることが多い—北アメリカも結局のところ、ヨーロッパの宗教迫害から逃れてきた人びとによって植民地化された土地だ。入植者植民地主義者は、自分たちが必要とされる故郷の建設を目指す。入植した人びとは、宗主国が勢力圏を拡大する際の手先となり、遠隔地の友好的な統治集団になる。

➡ 入植者は先住民社会の歴史を抹殺する = 排除の論理 = 民族浄化。

さらに問うてみたいのは、現代につづく紛争のいわば元凶でありながら、イギリスの責任が不問に付されているようにみえる。ただ、2025年9月に G7として初めて、カナダとともにパレスチナ国家を承認している。(日本は「いつ国家承認するかの問題で、いまは承認しない」という立場で承認していない。)

3 近代が生み出した新しい紛争

後述するエドワード・W・サイードにインタビューをしている、浅田彰『映画の世紀末』「パレスチナから遠く離れて」では、イスラエル・パレスチナ紛争とは「近代が生み出した新しい紛争」だと論じている。

ややもすると、中東というのは古くから民族紛争・宗教紛争の絶えなかった地域だというふうに思われがちですが、それはイデオロギー的な情報操作によって作り出された錯覚です。(略)いまでも続く戦争の種を撒き、それを煽ってきたのは、イギリスやフランス、そして第二次世界大戦後それらに替わってヘゲモニーを握ったアメリカだった(略)石油も出るし、地政学的にも重要な位置にある中東という地域に、自分たちの権益を確保するためのエージェントをひとつおいておきたい、という西欧の意図があって、イスラエルという国が作られた。

オスマン帝国ではユダヤ教徒からイスラム教徒まで、紛争はあったものの、総じて混在していた。が、「そこにいちど植民地主義が入ってきたあと、さらにそれに対抗しようとするときに、一民族一国家という近代の国民国家の原理を悪い形で模倣してしまって、それらがずっと睨み合うという不幸な状況が続いてきている。だから、数千年来の民族の争いとか宗教の争いとか言うけれど、実はそれは近代が生み出した新しい紛争なのだということを、あらためて強調しておく必要がある(浅田彰『映画の世紀末』p.213)」この認識は本書と論旨を同じくする。

➡ 本書で詳述されているとおり、ヨーロッパの植民地主義の負の遺産が現在の状況をもたらした

○ 日英同盟の取引

本書の監訳者の早尾貴紀は別の著書『イスラエルについて知っておきたい30のこと』で、日本もまたイギリスのパレスチナ支配に責任があることを指摘している。

よく、アフガニスタンや中東地域の諸悪の根源はイギリスとアメリカだと言われますが、日本がアフガニスタンよりも西に侵攻しなかったのは、東アジアでの植民地利権を最大限に広げるためにイギリスと取引をしていたからです。日英同盟(1902年、1905年)のときから大英帝国と大日本帝国は共犯関係にあります。

さらにその流れで、第1次世界大戦後、日本はイギリス、フランスとともに戦勝国になり、オスマン帝国とともに負けたドイツ帝国の植民地だった南洋群島を手に入れ、やはり国際連盟に委任統治を認められました。日本は南洋群島の委任統治を認めてもらうから、日本もパレスチナの委任統治を認める、そういう取引をしたわけです。ですから、日本はイギリスのパレスチナ支配に責任があるのです。(p.63)

➡ イギリスの責任が不問に付されているようにみえたとしたら、日本もまたそうではなかったか。

○ 大江健三郎『沖縄ノート』(岩波新書 1970)

日本人の、実際に歴大な数の人間がまさにそうであり、何といてもこの前の戦争中のいろいろな出来事や父親の行動に責任がない、新世代の大群がそれにつきしたがおうとしているのである。現にいま、若い世代の倫理的想像力の世界において、在日朝鮮人をめぐりどのような事態がおこっているかを見よ。ごく一般の愚かしい高校生がなにものとも知れぬものにつながる使命感、「或る昂揚感」に揺り動かされて、その稚い廉恥心すらそこなうことなく、朝鮮高校生に殴りかかる実情を見よ。この前の戦争中のいろいろな出来事や父親の行動と、まったくおなじことを、新世代の日本人が、真の罪責感なしに、そのままくりかえしてしまいかねない様子に見える時、かれらからにせの罪責感を取り除く手続きのみをおこない、逆にかれらの倫理的想像力における真の罪責感の種子の自生をうながす努力をしないこと、それは大規模な国家犯罪へとむかうあやまちの構造を、あらためてひとつずつ積み重ねていることではないのか。

➡ 「真の罪責感の種子の自生」を戦後、蔑ろにしてきた。→ おまけ

○ トミー・オレンジ『ゼア・ゼア』(五月書房新社)

もしジェノサイドや奴隷制の恩恵を受けた祖先を持つ家に生まれるほど幸運であつたら、知らなければ知らないほどに罪を免れ無垢でいられると思うかもしれない。だから当然、探し求めず、丹念に調べず、眠れるトラの周囲は慎重に歩こうとする。名字以上のことは見ないようにする。名字を遡ってみると、もしかすると、自分の祖先の歩んだ道が黄金で舗装されていたのか、あるいは罨がいくつも仕掛けられていたのか、分かるかもしれない。(p.179)

4 オリエンタリズム

エドワード・W・サイード 1935年、イギリス委任統治下のエルサレムに生まれる。アラブ・パレスチナ人。パレスチナ問題の代表的論客として注目を集める。

『エドワード・サイード OUT OF PLACE』(シグロ編 佐藤真／中野真紀子 みすず書房 2006年)でもイラン・パペが登場している。

サイードは、『オリエンタリズム』(エドワード・W・サイード 平凡社)のなかで、1917年のバルフォア宣言(パレスチナの地に「ユダヤ人の民族的郷土」を建設することを約束した)の書簡を書いた、イギリスの外務大臣アーサー・バルフォアを分析している。

それは、1910年の英下院での演説で、当時イギリスは、スエズ運河の支配などを背景にイギリス軍がエジプトを占領し、実質的な植民地としていたが、その正当性について議会で質問が出された。

「いかなる権利があって、貴君(バルフォア)は、貴君が東洋人(オリエンタル)と呼ぶことに決めた人々に対して、かかる優越的態度をとることができるのか(p.81)」と問われ、バルフォアは以下のように答えている。

私には優越的態度をとった覚えなどありません。ところで、どなたか上っつらの知識でもよいから、少しでも歴史を知っている方々にお尋ねしたい。英国の政治家が、エジプトその他東方諸国の住民のごとき偉大な書種族に対して、主権を及ぼすべき立場に置かれた場合、いったい、あなた方はその政治家が対処も迫られている事実そのものをまともに見すえようとする用意があるのか、と。我々は、他のどの国の文明よりも、エジプトの文明についてよく知っております。エジプトの文明については、はるかに遠い昔のことでも知っており、ことさら親しみをもっている。そして他の国についてよりも多くを知っております。エジプト文明は、私どもの国のちっぽけな歴史にくらべると、はるか彼方の過去に起源をもち、私どもの歴史がまだ姿を現わさない先史時代に、すでにその頂点を過ぎていたのであります。東洋諸国を広く見わたしていただきたい。そして優越または劣等を云々するのはやめていただきたい。

何よりもまず、この問題に関する事実に着目していただきたい。西洋諸国民は、歴史にその姿を現わすや否や、たちまち自治能力の端緒を示すことによって、みずからの真価を発揮したのであります。しかるに、広義のいわゆる東方(イースト)における東洋人(オリエンタル)たちの歴史の全体を一通りお調べになればよい。そこでは、自治の存在した痕跡などまったく見当たらないのであります。彼らの偉大な幾世紀は—今日の我々の目から見ても、それがまことに偉大であったことは確かであります—おしなべて専制、つまり絶対的な政府のもとで経過したのであります。文明に対する彼らの偉大な貢献は—今から見てまことに偉大ではあります—すべてかの専制的統治形態のもとでなされたものなのであります。征服者は相ついで攻めきたり、支配は目まぐるしく交代しました。しかしながら、運命の変転のいかなる曲がり角においても、我々が西洋的観点からの自治と名付けているところのものを、みずからの努力によって確立しえた東洋の民族というものは、ついにひとつだに現れなかったのであります。これが事実なのであります。(略)

これらの偉大な諸民族にとっては、一私はその偉大さを喜んで認めるものでありますが—その絶対的政府が、〔西洋の〕我々の手で機能せしめられることこそ、望ましい事態であるとはいえないではありませんか。私は、これを望ましいと考える。彼らが、我々の統治のもとで、いまだかつてその例をみない優れた政府をもつことになったということは、すでに経験に照らして明らかだと信ずるのであります。しかも、このことが彼らの利益であるにとどまらず、西洋の文明諸国全体にとっても利益であるということは、一点の疑問の余地もない。…我々は、エジプト人のためにのみエジプトに在るものではありません。なるほど我々はエジプト人のためにエジプトに存在するのではありますが、我々がそこに在るのはヨーロッパ全体のためでもあると言わなければならないのであります。

サイードは次のようにいう。「バルフォアがエジプト占領の必要性を正当化する際に、自己の念頭にある主権という概念からまず連想したものは、エジプトについての「我々の」知識なのであって、軍事力や経済力だけではなかった。バルフォアにとって、知識の意味するところは、文明をその起源から、盛時、衰退に至るまで概観すること—そして、もちろん、概観することが可能だ、ということである。(略)こうした知識によって対象化されるところのものは、(略)不変の安定した「事実」そのものなのである。そのようなものについて先述のごとき知識をもつということは、それを支配すること、つまりそれに対して権威を及ぼすということにほかならない。ここでいう権威とは、「我々」が「それ」—オリエントの国—の自主性を否認するということを意味する。なぜなら、

我々はそれを知っているとともに、またそれがあある意味で、我々が知っているごとくに、存在しているからである。バルフォアにとっては、エジプトに関するイギリス人の知識こそ、エジプトそのものなのであった。」

➡ 現代につづく混乱の端緒に、このような極めて傲慢で、悪辣な認識があった

そしておそらく現代にひきつがれている

さらに、この認識に既視感があるとすれば、コロンブスがアメリカ大陸を発見したとき、先住民が名付けた土地の名前を上書きするように、新たに名前を洗礼として、名付けなおしたことだった。「宣教師たちの洗礼によって、その他の住民たちはグアナハニの罪深い野蛮な風習から救い出されて、スペイン王の支配という有難い栄誉に浴する「サン・サルバドルの島民」になるのである。」(西谷修『アメリカ異形の制度空間』講談社選書メチエ p.46 於 2026年1月10日のつつじ読書会『写字室の旅』)

5 多中心的・多極的な世界

二国家解決、バイナショナリズム

先に触れたエドワード・W・サイードと浅田彰の対談(『「歴史の終わり」を超えて』中公文庫)

浅田 アラブの伝統のすぐれた面は、さまざまな文化、さらには別の宗教までも許容する、ある種の多文化性にありますね。

サイード その点を指摘されたことをうれしく思います。そう、アラブ世界の中には驚くほどの多文化的混合が見られます。(略)私の育った1948年以前の世界(イスラエル建国に先立つ世界)では、人々は自然に混ざりあって生活し、異質なものと異端的なものの共存が当たり前のことでした。ところがそれは純粹化の原理に基づく世界に取って代わられてしまった。その悲劇的な結果を、イスラエルやレバノン、そして旧ユーゴスラヴィアでも見るができます。

浅田 そうですね。旧ユーゴスラヴィアでは、オスマン帝国のもとでも、さまざまな民族や宗教や文化が共存していた。それが国民の純粋な同質性を強調する近代国家の原理が持ち込まれることによって、民族紛争の泥沼と化していったわけです。同じことは中東についても言えるでしょう。こうしてみると、千年以上も前から民族と宗教の争いが再生してきた、というような見方がいかに的はずれかわかりますね。

サイード それらは再生してきたのではなく、近代になって新たに生まれたのです。

(略)

浅田 とすれば、私たちは、そうやって捏造された歴史ではなく、別の歴史を思い起こす必要がある。それは、民族的・宗教的・文化的アイデンティティのルーツといったものではなく、むしろアラブ世界について見たような多様なものの共存の記憶でしょう。実際、そういう多様性をはらんだ地中海世界は歴史上もっとも豊かな可能性を秘めていたのであり、近代ヨーロッパもその遺産なしにはありえなかった。

(略)

サイード 私たちは歴史の袋小路を抜け、そういう多中心的・多極的な世界の歴史に向かって進んで行かなければならないのです。もちろん、それは容易なことではない。しかし、希望を捨てないようにしようではありませんか。

(『SAPIO』1993年4月8日号・4月22日号)

6 レモンの木 LEMON TREE

バイナショナルリズムということに思いをはせたとき、立山良司『イスラエルとパレスチナ 和平への接点をさぐる』（中公新書）に紹介されていたエピソードを想起した。以下に転載する。初版は1989年。

一通の手紙

親愛なるバシールへ

思いもしなかったような不思議なきっかけで私たちが知り合いになってから、もう20年になります。今、私はあなたが追放されそうだと聞きました。これがあなたへの私の最後の連絡になるかもしれません。だから私はこの手紙を公開書簡とすることにしました。最初に私たちの出会いから思い起こしてみましょう。

六日戦争(1967年6月の第3次中東戦争)直後、あなたは他の二人の人と一緒にラムレのあなたの生家を見にやって来ましたね。これが私にとって初めてのパレスチナ人との出会いでした。あなたの家族がこの家から退去させられた直後の1948年以来、私と私の家族はずっとこの家に住んでいたのです。1948年当時、あなたは6歳、私は1歳でした。私達一家は他の五万人のブルガリア系ユダヤ人と一緒に、誕生したばかりの国イスラエルに移民して来ました。あなたの家は“所有権が放棄された財産”とみなされたのです。

あなたが最初に私達を訪ねてきたあと、私はラマッラーのあなたの家に遊びに行きました。ラマッラーでは大歓迎を受け、私達は何時間も話し、すっかり友達になりました。しかし、私達の政治的な見方は完全に違っていました。私達はそれぞれが属する民族の苦しみが生み出したレンズを通してお互いを見ていたのです。

でも、私の見方に幾分かの変化が生まれ始めました。忘れもしません。ある日、あなたのお父さんがあなたの兄弟と一緒に私のラムレの家に訪ねて来られました。あの時、お父さんはすでに歳をとっていらして、目が不自由でした。お父さんは家のごつごつした石にさわっていました。それから「裏庭にはまだレモンの木がありますか」と聞かれました。私達はお父さんをたわわに実をつけたレモンの木のところへお連れしました。その木は何十年も前に、あなたのお父さんが植えられた木だったのです。お父さんは木をなでながら黙って立っ

ていらっしやいました。頬には涙が流れ落ちていました。

何年もたって、あなたのお父さんが亡くなったあと、私はあなたのお母さんからこんな話を聞きました。お父さんは何か心配事があって眠れない夜はいつでも、もうすっかりしぼんでしまったレモンの実を手に握りしめて、アパートの中をゆっくり歩き回っていたと。そのレモンの実こそ、あなたのお父さんが私達の家に来られた時、私の父が差し上げたものだったのです。

あなたに会って以来、この家は私たちだけのものではない、という気持ちが私の心の中に芽生えてきました。こんなにも沢山の実を結び、私達を喜ばせてくれたレモンの木は、他の人の心の中にも生き続けていたのです。

バシール、あなたはハバシュ(パレスチナ解放人民戦線議長ジョージ・ハバシュのこと)を支持し、この地における私達の民族の自決権を否定しています。ほとんどのイスラエル人は、パレスチナ人が爆弾を仕掛けたり、あるいは石を投げることでさえ、単に占領に反対する抵抗運動とはみなさず、むしろパレスチナの地にユダヤ人国家が存在することを拒否しようとするあなた方の深い意思と見ています。

私はパレスチナ人とイスラエル人の双方に、力の行使は基本的なレベルでは紛争を何も解決しないのだ、ということを訴えたいのです。この紛争はどちらの側も勝つことのない戦争であり、どちらかの民族が民族解放を達成し、他方が民族解放を達成できない、という戦争ではありません。

アッラー・マアクー神があなたとともにおわしますように。

○ 解説

この手紙は、1988年1月、イスラエルの英字紙『エルサレム・ポスト』に掲載された。

ダリア・ランダウというユダヤ人女性からバシール・ヘイリというパレスチナ人男性宛の公開書簡。

ユダヤ人女性ダリア・ランダウは1948年、彼女が1歳の時、ブルガリアから新生国家イスラエルに移住し、ラムレの家に住み始めた。1948年まで手紙の相手のパレスチナ人バシール・ヘイリとその家族が住んでいた家だった。ラムレはテルアビブとエルサレムの中ほどに位置し、元々はパレスチナ人の町だった。

1948年のイスラエル建国以来イスラエル領内に組み込まれ、ユダヤ人の町となった。

バシール・ヘイリとその一家は、イスラエル建国をめぐる第1次中東戦争の最中、ラムレの家を追われ難民となり、ヨルダン側西岸の町ラマッラーへ移り住んだ。1967年の第3次中東戦争でヨルダン側西岸がイスラエルの占領下に入ると、占領地住民はほぼ自由にイスラエル国内へ行けるようになった。バシール・ヘイリも第3次中東戦争直後、今はダリア・ランダウが住む彼の生家を訪ねたのである。「思いもしなかったような不思議なきっかけ」で二人は友人となった。しかし手紙にあるように、バシール・ヘイリはイスラエルに対し「テロ活動」を行ったという理由で1988年1月、イスラエル占領地から南レバノンへ追放された。

(立山良司『イスラエルとパレスチナ 和平への接点を探る』p.4 中公新書)

つつじ読書会としては2026年4月に取り上げた、鳥山まこと『時の家』を想起する。ある場所に、複数の思い出が重なる。

この家はその後、1991年にイスラエル系アラブ人とユダヤ人の平和と共存を促進するために OPEN HOUSE CENTER として設立されている。

ラムレにある OPEN HOUSE センターは、人口7万5千人のこの混住都市(住民の22%がアラブ人)において、イスラエル系アラブ人とユダヤ人の平和と共存を促進するために1991年に設立されました。ラムレにおけるユダヤ人とアラブ人の比率は、イスラエル全体のユダヤ人とアラブ人の比率とほぼ同じであり、ラムレはイスラエルの縮図と言えます。Open House センター自体もさらに小さな縮図であり、1948年以前と以後にこの地に暮らしてきた2つの家族は、イスラエル／パレスチナの土地を主張する2つの民族を象徴しています。

オープン・ハウス・センターのウェブサイト URL : <https://www.friendsofopenhouse.co.il/>

ウェブサイトを確認するかぎり、2025年の7月には、アラブ人の子どもたちが参加したサマーキャンプが催行されている。「Open House Ramle」で検索すると表示される。

○ おまけ

くりかえしのうた

茨木のり子

日本の若い高校生ら / 在日朝鮮高校生らに 乱暴狼藉
集団で 陰惨なやりかたで / 虚をつかれるとはこのことか
頭にくわっと血がのぼる / 手をこまねいて見てたのか / その時 プラットフォームにいた大人たち

父母の世代に解決できなかったことどもは / われらも手をこまねき
孫の世代でくりかえされた 盲目的に

田中正造が白髪ふりみだし / 声を限りに呼ばはった足尾鉬毒事件
祖父母ら ちゃらんぽらんに聞き お茶を濁したことどもは / いま拡大再生産されつつある

分別ざかりの大人たち / ゆめ 思うな / われわれの手にあまることどもは
孫子の代が切りひらいてくれるだろうなどと / いま解決できなかったことは くりかえされる
より悪質に より深く 広く / これは厳たる法則のようだ

自分の腹に局部麻酔を打ち / みずから執刀 / 病める我が盲腸を剔出した医者もいる
現実 / かかる豪の者もおるぞ